

「移行空間」としての「小空間」—移行対象との比較から—

Small Space as Transitional Space: compared with the Concept of Transitional Object

藤 巻 る り*

Ruri FUJIMAKI

1. はじめに

Winnicott (1971) は幼児がお気に入りのぬいぐるみやタオルなどを肌身離さず持ち歩くことを「母親と融合している状態から、母親の外部にあり独立したものとして存在する状態へ」の「移行現象」と考え、この時に使用されるぬいぐるみなどの対象物を「移行対象」と呼んだ。移行対象とは、客観的に見て子ども自身ではない対象物を、子どもが自分の一部であるかのように使いながら主観的世界と客観的世界との間（あわい）を体験している様を描出したものである。

Winnicottは「私たちが生を体験するのは、移行現象の領域においてであり、主観性subjectivityと客観的観察objective observationが感動的に織り混ざったところであり、個人にとって外在している世界という共有現実と個人の内的現実の中間に位置する領域においてなのである」と言う。そして移行現象は子どもの健全な発達過程である「遊ぶことplaying」に発展し、さらに人間の文化的活動全般へつながってゆくと考えている。

人間の創造性の原点ともいえる移行現象が起きる領域を、Winnicottは内界（心的世界）でも外界（客観的世界）でもない「中間領域」、「潜在空間」、もしくは「第3の領域」と呼ぶ。この領域では、自己と他者、意識と無意識、現実と幻想など、心理学的な二項対立概念が矛盾しつつ重なり合っている。この領域で起ることを対象関係という視点から記述したものが移行対象である。ところでWinnicottは母親の役割を「環境としての母親 environment-mother」と「対象としての母親 object-mother」の二つの側面から考えているが、後述するように、環境という側面についても移行対象の概念で（つまり対象関係として）論じている。そもそも移行現象を説明する概念として移行対象があるのだとするならば、移行現象を別の視点から—例えば空間（環境）との関係から—考えることもできるのではないだろうか。これが本論考の問題意識である。

「第3の領域」という考え方は、イメージが現れる‘場’を重視するユング心理学にも共通することが指摘されている（河合, 2013）。本論考では、これまでユング心理学的な視点から捉えてきた「小空間」（藤巻, 2001, 2009）を、移行現象（Winnicott）を担う空間という視点から論じることを試みる。

* 埼玉工業大学人間社会学部心理学科

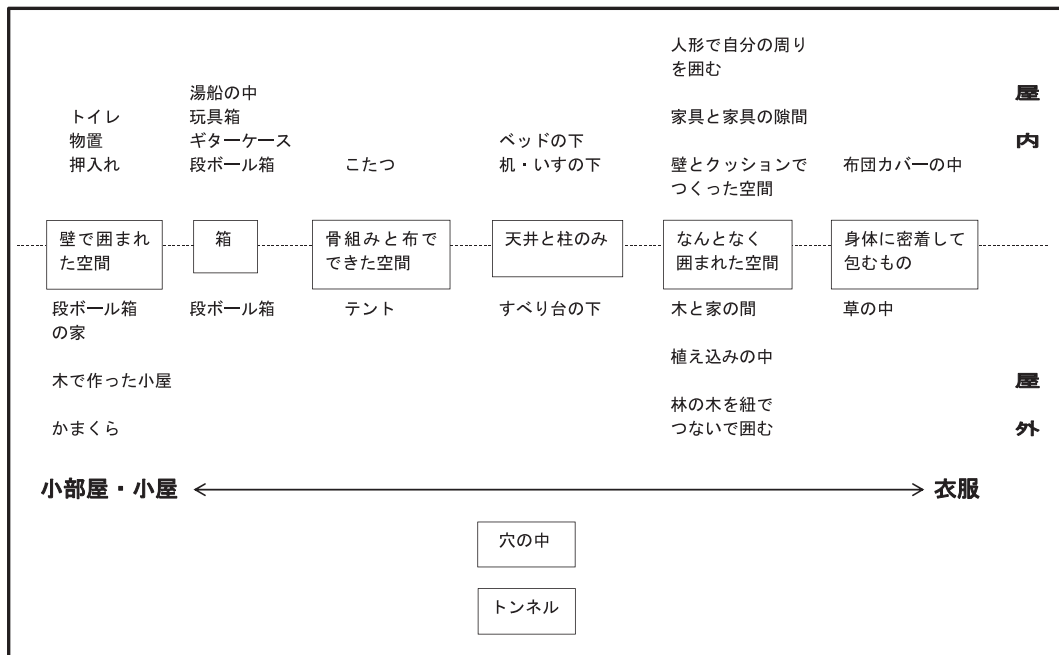


図1. 小空間の形態

2. 子どもが好んで入り込む小さな空間 — 「小空間」 についての研究

藤巻（2001）は、子どもが押入れや机の下などの狭い小さな空間に好んで入り込むことに注目し、そのような身体がすっぽりと入り込む小さな空間を「小空間」と名づけた。そして、小空間をめぐる体験が実際にどの程度みられるのか、子どもはそこでどのような体験をしているのか、どのような意味を感じているのか、大学生を対象に回想によるアンケートおよびインタビューによる調査研究を行った。

調査対象者78名中、小空間をめぐる体験が「ある」と回答した72名から106例のエピソードが報告された。それらのエピソードを、小空間の形態・そこでの体験の内容・その体験に感じる意味の3つの視点から検討し、ひとつのまとまりをもった現象として捉えることができた。ここでは、その中からいくつかの特徴を挙げる。

2-1. 小空間の形態について—「小屋・部屋」と「衣服」のあいだ

報告された小空間の形態は図1の通りである。押入れや段ボール箱など壁のある「小屋・部屋」に近い独立性の高い空間から、布団カバーの中など身体に限りなく密着する「衣服」に近いものまで、さまざまなヴァリエーションがあることがわかる。つまり小空間は、小屋・部屋のような親密な他者を招き入れることもできる「社会的な空間」から、衣服のような完全に「私的な空間」までの幅を持ち、「世界と個人を媒介する空間」として機能していると考えられる。

興味深いことに、小空間はこのような形態の違いにもかかわらず、ある種のまとまりをもった体験を誘発する。また、同じ空間でも状況に応じて、ある時は社会的空間として、またある時には私的空間と

して機能するという移行的な性質を持っている。具体的な例について、以下に挙げてみる。

事例A (父が改造してくれた一畳の物置部屋での体験から)

「周りは柵で囲まれていて、大人は入れないくらいの狭さで子供がちょうどすぽっと入るくらいのこじんまりとした空間だった。そこで1人でこもって絵を描いたり、集めてきた石ころを眺めたりしていた。(中略) 友達を招いて中で一緒に遊んだりもするけれども、そういう時は1人でいる時とはちょっと感じが違った。他の人が入る時は『ちょっと待って』と部屋の中の準備をすると同時に心の準備もしていた。」

事例B (庭の隅の木と塀の間のスペースでの体験から)

「隣の敷地との境界になっていて、柵からは向こうが見えたけれども子供がしゃがんで入ると向こうからは見えなかったと思う。かなり大きな木の陰で薄暗かった。(中略) ごく幼い時は兄と2人で、ある年齢以降はだいたい一人でその場所に入った。兄と一緒に時は遊びの続きで目的を持って入った。例えば宝物をそこに隠したり。自分にとって重要だったのは1人の時で、そういう時は遊びの一環としてではなかった。特に何かをするということではないが、くり返し何度も入った記憶がある。」

事例C (和室の押入れの上の段での体験から)

「兄弟と一緒に入ることもあったが、そういう時はふざけて入ったり、そこを家にしてままごとをしたりするなど遊びの一環としてだった。1人で入る時は遊びではなくて中でボーッとしたりいろいろなことを空想したりした。」

2-2. 非日常的な異空間 一個としての境界を緩め、それを守る空間

押し入れや机の下などの小空間は、もともとは何の変哲もない生活空間の一部であるが、その中に自分自身が入り込むことによって、空間に質的な裂け目が生じ、日常から隔絶した異質な空間として体験されることになる。小空間の中は魅惑的であると同時に怖さを感じる異界であったり、中に入ることによって包まれ癒されるシェルターであったり、中に入る者同士に独特の連帯感や高揚感が共有される共同体的な場として体験される。

藤巻(2001)の調査では、小空間は子ども達だけの空間という特徴が挙げられているが、プレイセラピーにおいては治療者と子どもが一緒に小空間に入ることはめずらしくない(例えば藤巻, 2009)。埼玉工業大学臨床心理センターが主催している子育て支援活動である幼児グループでも、担当学生達が子ども達と一緒に小空間に入る場面は多い(藤巻・富樫・加戸・永田, 2015)。このことが示唆しているのは、プレイセラピーのような場面では、客観的事実としては大人と子どもであっても、小空間の中に入っている時は心理的に子ども同士として体験されているのではないか、ということである。

つまり小空間は、一種の「コムニタス」(Turner, 1969) 状況を誘発する空間であると考えられる。コムニタスとは人間の社会的・心理的変革の過程であるイニシエーションに特有の存在様式であり、平等と連帯を特徴とする。実際に古代社会では、洞穴や特別に設えられた小屋など、小空間に類似した空間が、イニシエーションの場となることもあった。

このように、小空間は中に入る者の社会的な枠組みを緩め、時には自他の区別すら曖昧になるような心理的な退行を促しつつ、それを守る器として機能する空間装置であると考えられる。自我の枠組みが緩むというラディカルな事態を、‘病理’という形ではなく、‘遊び’という守りの中で体験できることは小空間の最大の利点であろう。特にプレイセラピーなど、大人が子どもの生きている心的世界に入っていく場面では重要な役割を果たすと考えられる。

3. 移行対象と小空間の共通点

上述したように、移行対象は移行現象の一つの現われとして取り上げられたものであるが、移行対象に関する記述には小空間にも当てはまるものが多い。以下にその共通点を挙げる。

3-1. 実在物であると同時に子どもの想像力によって創造されたもの

Winnicottによれば移行対象は子ども自身が創り出した対象ではないが、子どもによって‘見出された’対象であり、その意味では子どもの創造性の産物である。子どもは「実在の対象を使って、それを創造的にしたり、それを用いて創造的なものを作ったりし始める」(Winnicott,1971)のである。

小空間の場合は、何かで囲いを作るなど、実際に手を加えて空間を設える場合もあるが、赤坂(1991)が指摘するように、人がその中に足を踏み入れること自体が空間の均質性を破る契機となる。つまり小空間での体験は、すでに存在している空間に入る場合であっても、普段は人が入らないようなところに敢えて入り込むという主体的な行為によって、子ども自身が特別な空間を創造していると考えられる。

押入れや机の下など、何気ない日常空間の一部がワクワクドキドキするような異界であったり、フワッと身を包み込む癒される空間であったりする時、子どもは特別な空間を想像／創造している。このような主観的な世界と客観的な世界との重なり合いこそがWinnicottが移行現象と呼び、人間の創造活動の原点と考えているものであろう。

3-2. 普遍的にみられる現象

Winnicottによれば、移行現象は普遍的でどこにでもみられるありふれた現象である。その一つの現われである移行対象は普遍的にみられるものとしてすでに一般的に広く周知されている。

子どもが小さな空間に入り込むという現象も、これまで一つの概念として捉えられたことはなく、まとまった名前をつけられたこともなかったにもかかわらず、誰しも問われれば一つや二つは思い当たる体験を持っているような普遍的な現象である。藤巻(2001)の「小空間」に関する調査研究は数量的な説得力を持つ性質のものではないが、調査対象者の9割以上が小空間にまつわる体験を報告している。また、この研究について発表する場では必ず同様の体験についての報告が寄せられることから、子どもが「小空間」に入るということは普遍的にみられる現象であると考えられる¹⁾。

3-3. 健康的な魔術的色彩とその薄れ方

例えば、小空間は異空間として体験されることが多い。子どもはそこがただの押入れであることを知りながらも、深い森の中に一人ぼつんと取り残されたような孤独感を感じることもできるし、仲間たち

と宇宙探検に行く高揚感を味わうこともできる。このように小空間をめぐる魔術的な体験は現実と幻想、主観と客観、のあわい、つまり移行現象の特徴を備えている。

そして、こうした特別な色彩を帯びた体験は自然と薄れていくものである。Winnicottが移行対象の性質として述べているように、移行対象は抑圧されることもなく、内面化されることもなく、役割を終えるとただ意味を失う。小空間体験も同様に、その空間自体が忘却されるわけではない。移行対象が、役割を終えて特別な意味を失い、普通の‘もの’になるのと同様に、小空間もある時期を過ぎると日常的な‘空間’になっていくのである。

事例B (庭の隅の木と塀の間のスペースでの体験から)

「その場所は大人の目の届かないところだった。外部と隔絶しているという感じがはっきりとしていて他の場所とは違う特別な異質な空間だった。何か不思議な場所で、おそらなくてはならない場所だったと思う。小学校高学年になって一年間親の転勤でその家を離れていて、帰ってきてからは中学生になったこともあるが、生活が変わって、ぶらぶらする時間もなくなり、もうその場所には入らなくなった。もし今あったとしても近寄らないと思う。」

4. 対象と空間—「移行空間」概念の提案

これまで見てきたように、小空間をめぐる体験はWinnicottの移行現象の性質を持っている。小空間は移行対象と多くの共通点があり、かつ、‘対象’ではなく‘空間’であるということの意味も大きいと考えられる。移行現象を担う‘対象’が移行対象と呼ばれるのに倣って、本論考では移行現象を担う‘空間’を「移行空間」と呼ぶ。小空間は「移行空間」であるといえるだろう。

Winnicott (1971) は対象（環境も含む）との関係の仕方には男性的要素と女性的要素があるとして、その本質は「行うことdoing」と「存在することbeing」であると述べている。また、精神分析における欲動論は男性的要素である「行うことdoing」の側面の発達論としては正しいが、何かを「行うことdoing」の土台として、女性的要素である「存在することbeing」の側面がさらに重要である、とも述べている。Winnicottは、移行対象の使用の仕方では「行うこと」と「存在すること」の両方の側面を説明しているが（例えば、移行対象を手にしてすやすやと眠る子どもは「存在すること」を実現していると考えられる）、「存在すること」の側面については、対象との関係よりも空間との関係で説明した方がわかりやすいのではないだろうか。

実際に藤巻（2001）の調査では、小空間の中では何かを「する」というよりも、単にその中に「いる」こと自体が意味を持つという報告が多数見られた。

事例A (父が改造してくれた一畳の物置部屋での体験から)

「その部屋の中は子供しか入れない世界で、大人の世界のように明るく広くなく、暗くてこじんまりとして、それがいい感じだった。またその中では時間の流れも違うように感じた。普段遊んでいる時も時間は早く過ぎるけれども、この部屋だと加速的に時間が過ぎて、中で暇になって時間を持て余したことはない。中では何かを『する』というよりも『いる』という感じだった。」

事例B（庭の隅の木と塀の間のスペースでの体験から）

「退屈であるとかさびしいとかいう時に入るのだが、その中で何か面白いことがあるわけでもないし、別に何かが出てくるというわけでもない。何かをそこで『する』というよりも、そこに『いる』という感じが強い。」

事例D（ワゴン車の後ろのトランク部分に入った時の体験から）

「その空間は内でも、外でも、車の中でもない場所で、他にはそんな場所はなかった。でも自分がその中に入っていない時は、そこはただの荷物置き場であり、自分が入ってみてドアを閉められた瞬間はじめて特別な空間ができる。そこでは何を『する』ということではなく、その空間自体を感じていた。ワクワクしてとても楽しかった。」

小空間体験は、母親から離れた子どもが、主体的に「いることbeing」を実現しようとする普遍的な現象であると考えられることもできるだろう。対象関係論においては、赤ん坊が初めて出会う対象の象徴として‘母親の乳房’が用いられるが、赤ん坊が初めて体験する環境（世界）の象徴としては‘母親の腕の中’や‘母親の膝の上’を考えることができるだろう。Winnicottは母親（の乳房）を移行対象にしている子どもの例を挙げているが、母親（の腕の中、の膝の上）を移行空間と捉えることで母子分離の問題について考えてみることはできるのではないだろうか²⁾。

健康な子どもが母親の膝の上で遊んでいるとき、子どもは母親を感じているが意識はしていない。幼児や発達障害児など主体の生成が課題となるようなプレイセラピーの場面では、子どもが治療者と個として向かい合う関係になる以前に、治療者に背中を預けて遊んだり、治療者を土台や場として使用する段階がある。「移行空間」という視点を持つことで、このような段階で起きていることを、主体生成の重要な土台作りの過程として見ることはできるのではないだろうか。

また、空間は個人を包み込む環境であると同時に、個人の内側に想定される心という内的空間の象徴にもつながる。藤巻（2001）の調査研究では、小学校高学年頃になると小空間に入らなくなる、という報告がいくつか見られ、小空間体験は心という内的空間の形成につながっていくと考察している。移行現象の中でも、特に「行うことdoing」の側面に関わる移行対象が人間の文化的な活動全般へつながっていくのだとすれば、移行現象の中の「存在することbeing」の側面に関わる移行空間は、心という内的空間へつながっていくと仮定できるのではないだろうか。

5. 「中間領域」・「潜在空間」と「移行空間」

Winnicottは、移行現象が起こる場所を「中間領域 intermediate area」や「潜在空間（可能性空間）potential space」と呼ぶ。ここでいう領域や空間は抽象的な概念である。これに対して、本論考で「移行空間」と呼んでいるのは、押入れや机の下などの具体的な空間を指している。

客観的对象物であるぬいぐるみが、ある子供にとって掛けがえない「移行対象」として体験されるのが、「中間領域」もしくは「潜在空間」という抽象的な‘場所’である。これと同様に、押入れや机の下などの何の変哲もない小さな空間が、時に癒されるような、時に異界に通じるような特別な色彩を帯び

た「移行空間」として体験されるのが、「中間領域」もしくは「潜在空間」という‘場所’なのである。

具体的な空間である、ということは移行空間をめぐる体験が身体感覚を伴うことを意味する。移行対象が具体的な対象物であり、その手触りや実在することが重要であるのと同様に、移行空間は実際にその中に自分自身が入ること、そこにすっぽりと包み込まれているという感覚が重要なのである。

6. おわりに

Winnicottの移行対象と小空間を比較検討することで、「移行空間」—移行現象を担う空間—という視点を得た。今後は、実際のプレイセラピーの事例における小空間の機能を移行空間という視点から、考察したい。また移行空間は、小空間に限らず、思春期以降の若者たちが雑踏の中でもイヤホンで音楽を聴くことで私空間を作る現象や、心理療法における杵、箱庭療法など、身体性を帯びた空間体験について考える際に有用な視点となるであろう。

〔注〕

1) 例えば、本学で筆者が担当する「心理学研究法応用」の講義で藤巻（2001）の論文を扱った回の学生からのリアクションペーパーには、必ずと言ってよいほど学生自身の小空間体験が寄せられている。2013年～2015年までの3年間で計80名強の受講生のうち、小空間体験がないと報告した学生はわずか2名であった。

2) 本学臨床心理センターの幼児グループの活動（藤巻ら、2015）でも、‘母親の膝の上’に留まり続ける分離不安の強い2歳女児のエピソードについて、移行空間という視点から考察している。エピソードでは、‘母親の膝の上’という限りなく守られた移行空間からボールプールというより公共性の高い移行空間に入ったことがきっかけとなり、女児と母親と学生の間に遊びが展開し始める。

〈引用・参考文献〉

- 赤坂憲雄（1991）. 物語・空間・権力. 場所（現代哲学の冒険7） 岩波書店
- 藤巻るり（2001）. 子供が好んで入り込む小空間に関する一研究 箱庭療法学研究vol.13（2） pp43-56.
- 藤巻るり（2009）. 幼児のプレイセラピーにおける原初的な自他癒合性への参入—地べた（基盤）であり意識（主体）であるという動的なあり方を通して— 箱庭療法学研究vol.22（2） pp 3-18.
- 藤巻るり・富樫直・加戸美光・永田千佳（2015）. ボールプールをめぐる遊び—遊具を空間的テキストとして読み解く試み— 埼玉工業大学臨床心理センター年報第9号
- 河合俊雄（2013）. ユング派心理療法 ミネルヴァ書房
- 館 直彦（2013）. ウィニコットを学ぶ—対話することと創造すること— 岩波学術出版社
- Turner,V.W.（1969）. *The Ritual Process*. 富倉光雄（訳）（1976）. 儀礼の過程. 新思泉社
- Winnicott,D.W.（1971）. *Playing and Reality*, London: Tavistock Publication. 橋本雅雄（訳）（1979）. 遊ぶことと現実 岩波学術出版社
- Winnicott,D.W.（1965）. *The Maturation Processes and Facilitating Environment*. 牛島定信（1977）. 情緒発達の精神分析理論 岩波学術出版社

